

## 〈資料〉

和光大学人文学部紀要別冊'87～'93

和光大学人文学部・人間関係学部紀要別冊'96～'97

## 『エスキス』鈴木勁介 編者あとがき

『エスキス'87』1987年3月30日

本誌は和光大学『人文学部紀要』別冊として企画されたものであるが、“まえがき”でも既に触れられているように、今後継続して発刊し得るか否か命運定かならず、多くの課題をはらみつつ刊行された。

元来『紀要』とは、大学や研究機関において、その構成員の研究活動を公表する場として設けられているのであるが、個別論文に則していえば私的研鑽の発表という側面が強くあるために、読者の関心領域とかけ離れた内容のものについては興味を持ちようもないというのが実情である。さらに論文発表は個の恣意に委ねられているために、構成員のすべてが顔をそろえるはずもないことから、紀要によって大学総体の研究動向や活動状況をうかがい知ることも不可能である。

大学がみずからの存在のあり方を世に問う方法としては、入学試験における選抜方法やカリキュラムの独自性などさまざまにあるが、構成員の研究活動も大きな比重を占めるに相違ない。この場合、殊に構成員が新たに着手した領域や、論文としては未成熟な段階の構想や研究ノートの類いは、紀要の性格から掲載をためらわざるを得なくなる。だがそれらの、粗けずりであるが故に瑞々しい素材こそ論議を喚起するものであり、主体自身にとっても関連領域にとっても飛躍の挺子となりうるはずのものなのである。

本誌があえて紀要的性格を示す表題を避け、斬新な紙面構成を採用するなどの試みを行ったのは、従来の『紀要』に対する通念の超克という新たな提案を意図したからに他ならない。

総合雑誌を開いて「ウワッ、まっ黒」と叫ぶ感性に対して、それに迎合するのではなく接点を見出す意味で、新しい基軸が必要なのかもしれないとも考えるのである。若者の活字離れを指弾するのみではなく、活字文化の中で生きてきた古い世代が、みずからの世界観から踏みだしてみるという一つの冒険でもある。

紀要別冊という前提のもとで本誌に玉稿を寄せられた各位のうち、体裁や構成において意に添わぬ向があったとすれば、編者の責として御寛恕を乞う次第である。また経済学部の側からも本誌への寄稿申し出をいただいたが、既に印刷所へ入稿後であったために御期待に添えない結果となった。

本誌発行に至る間、多くの方々のお力添えをいただいた。殊に装丁・デザインを願った柊光紘氏と挿画を願った川添修司氏や、事務担当の山下健氏・柳沢茂夫氏には紙面を借りて謝意を表したい。

## 『エスキス'88』1988年3月30日

特定の組織の中で新しい試みが実現されるためには、企画立案側による主旨説明とそれに応えた人々の協力の下に、多くの困難や障害が克服されて初めて陽の目を見ることとなる。設立にかかわった当事者からすれば、その努力の結果をむなしくしないためにもまたより理想の実現へ近づくためにも、維持・発展を希求するのは当然といえる心情であろう。

それはしかし常に何らかのかたちで矛盾や副作用を含みこんでしか成り立たないはずなのだが、関係者の思い入れと他の成員の無関心が相乗して、結果として既定の事実化への途を歩み権益となり、かりそめの制度となって、形骸化してもなお存続し続けることとなる。

開学以来の、そしてまたその後に作りだされた多くの“新しい試み”においても、時代状況の推移の中で既に内容が空洞化したり全く変質しているにもかかわらず、一種の既得権によってのみ存続し続けているものが無いとはいえない。

“エスキス”誕生の契機には、紀要本誌の投稿論文の増加という隘路の打開や学生論文への門戸の拡大、研究ノートの類いの活字化への機会の提供があり、さらに年度毎の研究業績発表の義務化というある意味では硬直した発想に対する代替案等も含意されていた。

また紀要本誌の学生への無償配付というすぐれた試みが、“ただで貰える”ということからする安易さによって書物に対する無感動感を醸成したことも事実なのであった。

数年前より五月の受講登録時に紀要の配付がなされて以来、学内各所に学生によって置き忘れられた紀要が放置され、はなはだしきはゴミ箱に投入されてあるという冒瀆的な事態すら見られたのである。多くの問題を含みながらも本誌有償頒布の試みは、右の事態に対しての一つの提案ではあった。だがある矛盾に対する解決は結果として次なる矛盾を産出する。

“エスキス”も一つの新しい試みであった。それを一定の結果として認めてしまったとき、既に内在的に頹廢化や墮落への途を歩き始めるであろう。したがって本誌は改めてその存否につき検証の場を設けるべきであると考えている。

紀要委員会の改選を機会にエスキス委員会もまたここに解散を宣言し、新たな方針策定のための審議の機会を求めることとしたい。

## 『エスキス'89』1989年3月30日

研究機関でもあり教育機関でもある大学にあっては、人々との交わりの場においても目にする文字においても、知識ないしは知的営為にかかわる言葉に接する機会が多い。

元々、知識という言葉が含意していたのは、単なる感覚的な感性経験に類するような情報量の多少などにとどまるものではなく、知見であるとか知恵や知性といったものを含みこんだ、より包括的な知的概念であったはずである。知識とは直観や経験によって得られた事実認識に基いて、客観的な普遍妥当性を導き出すことであり、そもそも善知識であるべきものである。

言葉“知識”において皮相的な面でしかない“見た・聞いた”という情報量の部分のみが浮上ってきて、知的営為としての認識や了解にかかわる部分が沈潜し始めたのはいつ頃からのことであろうか。裏腹な関係で言葉“知”という表現形式が一種のファッションのように、多用され始めた頃と呼応しているように思える。

現在のようなかたちでの言葉“知”の成立契機には、それが voir の訳語として用いられた頃からとも考えられるが、いずれにせよ言葉“知識”の概念の曖昧化を止揚するものとしての必然性があったのに違いない。

だが“知”をさしたる検証をすることもなく濫用することによって、“やまいだれ”がかぶせられるようになってはなるまい。知識の多用が悪知識を生みだしてはならないからである。

古き書物を繙けば、先学の多くが後世に伝えようとしたのは、己の盛名や権威や知識量を誇示することではなく、みずからの生を厳しく問い直す中で“我等いかに生くべきか”という、知的生物としての人間のあり方に対する問いかけであったことを、知るべきであろう。

業績点数が至上とされる現代にあつては、研究者の仕事が己の信を問う以前に、知見の紹介や借りものの理論で料理をすることを慣らいとする趨勢に向うのも、致し方のない現実といえるのかもしれない。このことはまた、業績公表の機関として紀要や論集が存在する限り、論者の思想や姿勢はどうあれ形式的に整った論文の発表の場であるとする認識が、一般的通念となっていることを意味する。

したがって、それぞれの専門領域とは一見して直接には交わりがたく思えるような、みずからの精神の軌跡やあるいは己の感性や悟性を洞察するという作業などは、論文としてはそぐわないものと意識されてきたのであった。

だが学を問うという作業の内には、構築された論理もさることながら、論理形成に至る当事者の思想や姿勢もまた問い質されているはずなのである。それぞれの専門領域とは彼の生そのもののはずだからである。

現在、哲学は盛行の時代なのであろうか。それとも不毛の時代なのであろうか。数多く刊行される、言葉“知”が散りばめられた難解な書物からは、先人達の残したもののから受ける一語一語にこめられた骨身をけずり血を吐くような思いといった、あの感動は伝わってこない。

本年度より新たに設けた“エスキース”の欄は、近來の紀要や論集には馴染まなくなった、学の根元を探るという作業のための一つの間を提供するための試みである。

みずからを省みて、多くの点で忸怩たる思いに捉われつつも敢えて書き記す。

『エスキス'90』1990年6月10日

本号に掲載したものの中で、研究動向の一文は出色であったように思う。研究者や大学人などが通念としてもっている“生真面目さ”に裏打ちされた“研究動向”への期待から

すれば異色といえるものだからである。

だが真の意味での真面目さとは何かと考えてみれば、これは結構厄介なことのように思う。

個的体験の中で限らない挫折感や虚無感を初めて味わったのは敗戦の日であった。戦争に敗けるなどとは考えてもいなかった無垢な愛国少年にとって、それはまさしく晴天の霹靂だったからである。少年達に戦争協力を強いた教師達は、戦後になってその責を軍部に転嫁することにより、みずからの正当性を保持し得た。

戦争協力者であった教師達の中で、時代に迎合することに巧みな人々もいたであろうが、多くは真面目な教師であり、真面目な気持から生徒達を叱咤したのではあるまいか。

そしてまた、戦争中に国家や軍に対して非協力的であったが故に、非国民とそしられた教師達が不真面目な教師だったはずがない。

二十余年前の大学紛争当時、正直にこれは文化大革命だと思った。大学とか教師とかの権威や威信がこれほどまでもろいものかと思ったからだ。だが既存の文化は革命されることもなく旧に復したようにみえる。

今は死語化したが、左翼小児病という言葉には内実よりも形式のみが先行するという硬直した精神に対する揶揄がこめられていた。制度とは形式のみがおりのように堆積したものともいえよう。

己の正当性や所属している集団の権威性を疑うことなく信じている者にとっては、作られた制度というようなものも絶対視するしかないであろう。

形式主義者が跳梁し始め、制度が権威を帯び始めると組織はしなやかさを失う。事の真実を語るためには、時に冗談にまぎらせて述べる他のないこともあるが、額面通りにしか理解し得ない精神は硬直した精神としか言いようがないのではあるまいか。

役割としての道化が受けもつ批判精神のようなものが正当に受けとめ得なくなった時、組織は危殆に瀕する。危険な存在とは、後指さされるような不真面目な輩ではなく、生真面目であることを誇る気運の台頭である場合がしばしばあり得る。

誤解を招くおそれがあるので敢て記すならば、生真面目であることより不真面目であることが良いのだなどとは当然の事ながら考えているわけでもなく、また一つの組織体における特定個人を俎上に載せようとした話でもない。

憂うべきことがあるとすれば、それは若者達の中に自由であり続けるための労苦よりも、拘束されることの安きを求める風潮が瀰漫し始めたことである。既存の制度の下に安住することの楽を知ってしまえば発展はない。

近頃巷間で話題となっている中学校や高等学校を取り巻いている憂慮すべき現実が、大学にも浸透し始めているように思うのである。

大学にとって財産とは施設ではなく高名な大教授でもなく、何よりも活力のある学生や卒業生達のはずなのである。

## 『エスキス'91』1991年6月30日

この年について語るべき事があるとすれば、それは年の初めから開始された湾岸戦争と東欧圏の動きについてであろう。戦争報道などというものが愉快であり得よう筈もないのだが、とりわけこの間の報道は苦々しい思いに終始したのであった。

多分それは、かつてこの国が陥った惨めな体験の、写し絵のような図式の中で展開したためであろう。

前世紀以来世界を制覇した国々によって、植民地支配の利や戦争の仕方を教えられた後進国が模倣しながら成長し、やがては自らの力を持ち彼らの意志に従わず、その世界支配に脅威を与えるようになれば、完膚なきまでに叩きのめすという図式であり、これは家畜の飼育と変わらぬ飴と鞭の使い分けである。

戦闘力の喪失を十分承知の上で、とどめの新兵器を見せつけることまで同一であった。

この国が近隣諸国に犯した罪を正当化する意図はないのだが、建前としてアジアの西欧支配からの解放をうたったことと、イラクがアラブの大義を標榜したことに同根の思いを見るのである。

残念ながら自らを盟主に位置づけるといふ、傲慢な錯誤のこれも同様な轍を踏んだのである。

今回のクエート侵攻は、アラブ社会を初めとして西欧的近代化の遅れている国々の資源を収奪することによって繁栄してきた欧米諸国や、それに追随してきた社会にとっては容認し難い方向であったが故に、叩くのには格好の機会となったのであろう。

奇妙なことに、前の大戦で正義を唱った戦勝側三国は今回もまた手を結ぶのであり、正義という言葉の持つ空しさをこれほどまでに感じさせられたこともなかったのである。戦後四十六年を経てこの構図が何も変わっていないという、寂漠とした思いが前述の不快感を導き出したのに違いない。

いくらかは利口になったかに見えるこの国の政権担当者は、超大国に忠誠を示すことによってさし当っての保全をかちえたのであった。

だが権力とは多くの場合自力で強権化し得るのではなく、これら忠誠者が支えることによって仕立て上げてしまうことが多いということを忘れてはなるまい。

今年の本学の入試問題に、人間とは弱き者でも手を結び合うことによって強者を倒せる、という主旨の一文があって興味深かった。出題者の意図がいずれにあったのかは知らないが、世界史の流れは人類が理想として求めるものと逆行するような形でしか実現しないのかと、暗鬱な思いにとらわれざるを得ないのである。現実には強き者が手を結び合い、そのおこぼれを巡って弱き者達は相互に対峙し合うからである。

そしてこのことは国家間の問題であるばかりではなく、小さな組織体の中でもありふれて存在することである。

強権力が機能している間はそれでも見かけの安定が保てるが、一旦瓦解した暁の悲惨さを教えてくれたのが東欧圏であった。人類は有史以来最大の、危機に直面しているのかも



知れない。

近代における国家の構築は人類の知恵の所産ではあったが、付随して内包する矛盾が大きく浮上したのがこの年の世界の動きであった。国民や国家について改めて考えるべき時が来ているのであろうし、またそれ以前の問題として個と社会や組織の関係を冷静に検証する必要もあるのであろう。

## 『エスキス'92』1992年6月30日

一人の老教員がこの春定年退職された。芸術学科教授豊田敦先生。先生の最終講義録が同学科から日を置かずに刊行された。題して「学校の先生五十年」。

確かに先生は、自らを“先生”に徹して五十年を貫かれたのであったと思う。中途半端な生き方しかできない己を省みて、これも一つの壮烈な生のあり方であったと納得した。

小柄な体をやや猫背にして、いつも控え目な笑顔を絶やさなかった先生の人となり、しみじみと伝わってくる内容ではあった。

だが登場した幾人かの中で故梅根悟先生との出会いの場面はとりわけ印象深く、その巨大さを改めて知らされた思いをしたのであったが、考えさせられたのはお二人がまだ二十代から四十代の頃の話ばかりなのであった。

大学が創立されてから二十六年。先生は、この歳月が何であったかを、残った我々が考えるべく宿題を出して行かれた、と聴き取った聴講者もいたのであった。

ところで現在、大学をとりまく状況はきわめて厳しいものとされている。それはより本質的な部分において言える筈のことなのだが、さし当たっては就学人口の激減が焦眉の問題であるために、そのこと以外は課題とはならないかのようですらある。

それぞれの大学で、学部学科の名称変更や再編ないしはカリキュラムの手直しが試みられているのもそのためであろう。

一見すればそれぞれが独立したテーマのように見えても、その意図するものには共通するものがあり、幾つかのキーワード的な語を見いだすことができるが、わけても体験学習や生涯教育は多くの大学において売り物とされることが考えられる。

それは就学人口減少という隘路打開の手だてとして、生涯教育課程や社会人入学制度は高い効率が予想されることから、経営側からも導入が期待されるだろうことと関わるからである。

留意さるべきは、社会人入学制度や生涯教育課程が大学の就学者減少対策として企図するのと並行する形で、有給教育訓練休暇の受け皿となるリカレント教育の場への位置づけを国家から要請されるであろうことや、既存の社会教育との兼合いについて、如何なる理念のもとに大学がカリキュラム化し得るかという、重大な課題を背負い込むという点である。

大学は専門性という厚い防波堤に守られてきたために、研究職はその中で借り物の知識量のみを増やし続けてきたのが実体といえなくもない。そのことが、現実から遊離した感

覚を当為のものとして“姥捨山”を実現した痴呆老人の置き去りという、世代間戦争の到来すら予感し得なかったのである。

生涯教育課程の受講者の多くは、おそらく安穩と高等教育を受ける余裕もなく実社会を戦い続け、厳しい人生を生き抜いてきた人々であろう、

これら人生の先達に、人生経験においては「五十、六十は鼻垂れ小僧」でしかない若輩の我等が、おこがましくも何を語り得るかと考えれば、うそさむい思いに捉われる。

最高学府という幻想が入学後に裏切られた若者達に対しては、それも人生勉強の一つと開き直ることも出来ようが、生涯教育に期待して来る中高年層を裏切ることは許されまい。

今まで私学を支えてきた就学人口増大の基底には、己が果たせなかった夢を子に託した、これらの人々の熱い思いが背景としてあったからである。この人々の大学への期待に応え得なかったとき、制度としての大学は崩壊するのかも知れない。

生涯教育に関与するに当たり、如何なる哲学をもって臨むかというところで、それぞれの大学の真価が問われるのであろうし、それがまた豊田先生から課せられた宿題に対する我々の答えとなるのでもあろう。

### 『エスキス'93』1993年6月30日

己の周辺で、還暦という言葉を目にする機会が多くなった。顧みれば、よくぞ生きてきたものとも思う。

人はそれぞれの感慨と共にこの言葉を受け止めるのであろうが、“老後”や“第二の人生”などという言葉のみが想起されて、およそ“希望”とか“飛躍・発展”などの語にはつながらない。

通念として共有されている言葉“還暦”の意味は、個体差とは関わりなく齢六十に達すれば“老人”という範疇に入ることであり、制度的には現役の第一線から身を退く状況が用意されていることにある。

心身共に健康であるにも関わらず職を奪うことへの疑義が出される一方で、否応なく弱者とならざるを得ない老人への配慮は必要であろうが、それとは別に考えるべきは老害への対処であろう。

自らがこの範疇に組み込まれつつあるが故に言えるのだが、老人は言われるようには脆くもなく高潔でもない。

時に傲慢で尊大であり、時には狡猾で猜疑心が強く唾棄すべき存在でもある。

それは多分、理性と感性の均衡を制御する力を失なったために、個の性がむき出しになってしまうためなのであろう。

私立大学の教員社会は一般の職場とは異なり、還暦を過ぎても十年は現役であることが可能な世界である。老害も多くなるということであり、十分留意してかかる必要があろう。

心すべきは、それが肉体的加齢による社会活動の不適合性にあるというよりも、他律的に畏敬されることを当為とする権威性にあり、それを許容せざるを得ない組織への甘えに

基づく謙虚さを失なった倨傲な心性にある、ということである。

この職場を得た幸せは、老害とは無縁な見事な生き方を示された幾人かの老師に巡り逢えたことであった。

開学当初、古田拡先生は「先がないから読む本を選んでいる」と言われた。まだ若く、読書量の少なさを嘆いていた身としては理解に苦しむ言葉であった。だが視力の衰えは、それを現実のものとしてしまった。

小野忍先生は、熱を込めて視野を広めるようにと諭された。硬直しがちな精神活動を活性化し、柔軟な思想を保つことが如何に困難であるかが少し判るようになった。

西順蔵先生は、あくせくしてもさして変わりはないと、達観した生のあり方を言葉少なに語られた。

宮川寅雄先生は、喧嘩早く稚気に満ちて江戸時代の旗本奴そのままであったが、肉体の衰えはさしおき、精神の若さを大切にすることを教えられた。

そしてこれらの人々は、世の中から身を退くときはかくあるべしとでもいうように、何れも卒然として世を去られた。

それぞれの師との語らいは心楽しい一時であったが、その中で如何に多くの教訓を与えられていたのか、若かった己は僅かにしか理解し得なかった。今となっては何よりも、その邂逅の時の遅きを悔やむのである。

これらの人々との出会いの時は、死語と化しつつある学恩とか清談という言葉がふさわしかったように思う。

何を後輩に残すかを語り得ぬものは、先達足り得まい。

古田先生は、人前に出すべきでないと判断した時に提出するようと、「老妻に辞表を渡してある」と言われたが、身の退き方は進むのに比べて遙かに難しい。

これらの人の死の早きを惜しみつつも、去りぎわの見事さを思う。老害とはおよそ縁遠い生き方をされた人々であった。

## 『エスキス'96』1996年3月31日

一九八六年に、当時の紀要委員会から『人文学部紀要』の別冊として教授会に提案された本誌は、大方の理解が得られたとは必ずしも言えない形で発足したのでした。

それから十年の歳月が過ぎました。この間、本誌は『紀要別冊』という誌名からイメージされる通念を変えた斬新なブックデザインや、指導教員によるコメント付きの学生論文の掲載、実技関係の諸教員による色刷り口絵の「エスキスギャラリー」の試みなどを行ってきました。

『エスキス』は、大学人が共有してきた『紀要』に対する認識に幾分かの問題提起をしつつ、それなりの役割を果たしたように思います。

しかし人文学部から人間関係学科が独立して人間関係学部が誕生し、『エスキス』も新たな方向を模索せざるを得なくなりました。両学部紀要委員会は『エスキス』の存続を決



めたのですが、いずれにせよ第二期『エスキス』は、新しい方向を作り出さざるを得ずまい。

本誌が始められた契機には、活字離れを起こしている若者達への配慮もありましたが、それよりも大学紛争当時の教訓が少なくはなかったのです。

当時の学生達が教師に投げかけた言葉の一つに、「専門馬鹿」というのがありました。教師が専門の壁の中に籠もっている限り、学生達は教師を彼等の土俵に引きずり込むことができなかったからです。他方、教師は己の専門領域を堅持しつつも、彼等との対話の途を探るべく苦慮したのでした。

このことは、教師相互の間にも言えることでした。それぞれが自らの専門性から飛翔しない限り、教師相互が認識のあり方の違いについて了解しあえないのではないかということです。時代の変化に即応するためには、既存の体系や枠組みでは対処し得ない時代だったのでした。それが『紀要』のあり方への、問い直しを迫ったのかも知れません。

『紀要』に投稿する論文は、それぞれが属する専門領域の研究者に己の業績を周知させる役目があることは確かでしょう。ですが、総体として一冊の書物になったとき、『紀要』は当該研究機関の主張や研究動向を公示するものともなりましょう。

前者を重視するか後者を尊重するかということに関して言えば、奇妙なことに紛争をくぐり抜けた年輩の教員と若手教員の間に認識の違いがあるようです。若い人の方がより強く〈格調〉や〈伝統〉を重視する傾向にあるように感じるからです。新保守的傾向と言うべきか権威主義と言うべきか判りませんが、新しい知的エリートの一つの傾向なのでしょうか。

何について如何に語るかという現実認識において、世代間の中で転倒しているのか錯綜しているのか注目したいと思います。

今後、大学は厳しい時代を迎えることになると思いますが、そのような時代状況の中で、それぞれの大学は研究と教育の場として如何なる独自性を打ち出しているかについて、個人的な情報発信をし続けなければならないでしょう。

大学人がアカデミックな研究を推進すべきことは本質ではありますが、表現手段においても〈格調〉や〈伝統〉を踏襲しなければならないのかということについて、相互の認識のずれを如何に克服するかは結構大事な課題のようにも思うのです。

かつての時代、学生達によって作られたそれぞれの大学の『大学新聞』は、外部の者に当該大学の力量を窺わせる大切なメディアの役割を果たしていました。残念ながら、現在の若者達にそれらを期待することはできないように思います。

大学が刊行する出版物として、私達は如何なる活字文化を構築し得るのでしょうか。

## 『エスキス'97』1997年3月20日

何かと物議を醸した『エスキス』でしたが、この号で一一冊目となりました。一〇号をもって一区切りというのも、一つの方向だったかも知れませんが、続行を決めた紀要委員

会の指示でこの度も編集に関わることになりました。

『エスキス』にまつわっては経費に関する苦情が多かったので、この事のみは発言をしておかなければなりません。

この書は元々が、一定の編集方針や特定の旗の元に企画されたものではなく、状況の変化に応じつつ編集のあり方を改め、修正を重ねてきたのでした。バックナンバーを通覧すれば、それぞれの号毎に少しずつ編集のあり方が変化している様子を見て取れると思います。

ところで二号目から登場したエスキス・ギャラリーは、本書の性格に一つの転機をもたらし、編者の意識にも大きな変革を促した出来ごとだったのです。

人文学部には開学当初より芸術学科が存在し、実技の講義や演習があるにも関わらず、関係教員に対しては発表の場を用意していなかったという事実についての開眼でした。実技系の教員は学外で個展を開くか公募展に出品する以外には、己の業績を開示し得る場を学内では与えられていなかったのです。少なくともみずからを省みれば、何度か紀要委員会に属した中で、作品の掲載について考えるという発想が全くなかったことに気づかされたのです。

糺すべきは、非活字系の表現手段を業としている教員からの招待状や案内状を得たとしても、実際に足を運ぶ他学科の教員は僅かではないということです。活字系教員の多くは、同僚がどのような作品を手がけ、如何なる作風であるかを知ろうともしなかったのです。

ここに、活字系教員の無意識な傲慢さと非活字系に対する無自覚な驕慢が存在していたと言わざるを得ません。「大学の出版物に美術書のような本が必要か」という批判もあるようですが、それこそは、非活字系の仕事に対する無知と無理解を示すものでしかないであります。

編者は、絵画そのものについては実際のところ素人でしかないのですが、基本となるのは構成と色彩であろうと考えます。この場合、構成を重視する作家の場合は、単色の写真版でもよしとするかも知れませんが、色彩を重視する作家の場合はカラー印刷でなければ、掲載すること自体が意味を失うのではないかと考えたのです。

実際のところ、紙質の違いやインクののせ方によって、これが同じ作品かと思うほど発色や色調が変わってしまいます。ですがそのためには、印刷機に張り付いて職人とわたりあい、協議し、何度も校正刷りを出させることでしか達成できない、困難な作業が伴います。

経費節減を至上命題とすれば、原画とはおよそイメージが変わってしまいますが、とにかく色刷りで出すことは可能でしょう。ですがこのことを、活字系の執筆者の場合に当てはめれば、以下の事情と本質において全く変わらないことに気づかされるのです。

古典を専門としている研究者が「ゐ」や「ゑ」の活字がないからという理由で、「い」や「え」で妥協し得るでありましょうか。外国語を研究する場合に現代中国の文字やギリシャ

文字がないからといって、当用漢字やローマ字で代用することを許すでしょうか。実験結果や調査結果の報告で、印刷費節減のためにとデータや図表の削減を求められて納得するでしょうか。

「エスキス・ギャラリー」は、単なる口絵欄や捨てカットではありません。非活字系教員に与えられた発表の場だということを、改めて再認識しておかなければなりません。そして活字のみが研究発表の手段ではない、ということに思いを馳せていただきたいのです。

このような紙面構成における配慮は、エスキス・ギャラリーのみに限ったことではありません。注意深い執筆経験者は、紀要本誌に比べて写真の階調が格段に良いと感じたり、変哲のなかった己の図表が見やすくなっていて驚いたことがあるはずです。

編者は写真や作図の専門家ではないために、注文や指示はし得ても実際の作業はプロに任せざるを得ません。経費は当然上積みされます。そこで、「それまでする必要があるのか」、というのも一つの問いでしょう。

この点についても、相互理解を得るために提言しておく必要があると思います。

かつての大学における講義の形態は、時おり教師が注釈や解釈を加えながら講義ノートを読み上げ、学生はひたすらペンを走らせるという形式でした。昭和三〇年代まで、〈教授法〉などというものを大学教員は考えもしなかったし、する必要もなかったのです。

現在の一般大学ではこの形での講義に学生がついてこないことは明らかです。受講者が如何に講義に興味を抱き、授業に集中し得るかを配慮しなければならなくなっています。現代の大学における教師と学生の関係の中で生み出された、これが現実の姿です。

同様なことは、己の思索の結果や研究の成果を論文や著作で表明する場合にも当てはまります。学会誌の場合は、論述の質や中身のみが問われるために、プレゼンテーションに配慮する必要はないかも知れません。ですが所信を広範な読者に訴えるためには、教授法と同様な努力が要求されるのです。

若者の活字離れを憂い、専門書の売れゆき不振を慨嘆する以前に、さまざまな方法で「如何にして読ませるか」という、時代に即した実験的な試みがなされなければならなくなっています。現代はそのような時代だという覚醒が、大学人に求められていると考えるのです。

大学の刊行物であればこそ、時に経費を度外視してでも執筆者が納得し、読者が満足し得るものを出さなければならないのではありますまいか。

この精神を見失ってしまったとき、『エスキス』の生命は絶たれると考えるのです。

\*本稿は、元々『エスキス』の「編者あとがき」として、縦書き、15～22字詰めで書かれたものです。改行が多く、数字は漢数字を使用しておりますが、原文を尊重し、ここに再録いたしました。